

夏休みも半分をすぎたある日、タカキは家の庭で一匹の天邪鬼をみつけた。

自由研究をなににしようか迷つて、植物の観察日記でもつけようかと、庭を見回していたところだつた。

「あんまりめずらしい。あまのじやくじゃないけ。このあたりにもまだいたんだなあ」縁側でお茶を飲んでいたばあちゃんが、湯のみから湯気ただよわせながらそう言つた。あまのじやくつて言つのか。タカキはかがみこみ、そのちいさな鬼をよく見てみた。これは自由研究にいいかもしない。みんながあつかわないような題材を選びましょうつて、富子先生も言つていた。

天邪鬼は池の水辺にのびてひくひくとしている。ぐつやら衰弱しているもよう。なにか食べ物が必要だ。タカキは冷蔵庫をのぞきこみ、なにかないと物色した。とりあえず朝

「」飯の残りの玉子焼きと、シャケの切り身を失敬だ。

「それ、あまのじやく。エサだぞ」

タカキは玉子焼きとシャケの切り身を差し出すのだけれど、天邪鬼はふいと無視した。これは食べないのかなと思つて、またキッチンを物色する。食パンを一枚と、バナナを失敬。天邪鬼にやるのだけれど、天邪鬼はこれまた無視。一体なにを食べるんだろう？ ドッグフードに手をかけると、ペロがわうつとほえて抗議した。こめんと謝りながらまた失敬。天邪鬼は完全無視。

「タカキ！ 食べ物で遊んじやいけないつていつも言つてるでしょ！」

お母さんの雷が落ちた。

「……怒られちゃつたじやないか」

玉子焼きと、シャケの切り身と、食パンとバナナとドッグフードとポテトチップスとバニラアイスとお徳用カーネ缶に囲まれて、タカキはがっくり肩を落とすのだけれど、天邪鬼は知らん顔。

「食べたくないなら、べつにいいよ」

タカキが片付けようと手を伸ばすと、さっとその手から玉子焼きをさらう天邪鬼。シャケの切り身も食パンも、バナナもドッグフードもポテトチップスアイスカーニ。一切合切手を伸ばし、もぐもぐ一氣にたいらげてしまうと、また知らんぷりして眠りだした。

タカキは一階の自分の部屋からノートをとりてくると、表紙に『あまのじやくの飼い方』とタイトルをつけた。

それから『エサのやり方』と章を作つて、ちょっと考えてから書きこんだ。
『エサをやりうとしないこと』

「タカキ、ペロの散歩に行つてきて」

お母さんに言われ、タカキはペロを連れて外へ出た。

「あまのじやくも元氣になつたなら、散歩へ行こうよ」

タカキはそう言つて誘うのだけれど、天邪鬼はひたすらだるそうに、後ろ手に手を振つてみせるだけ。

「しかたない。ぼくたちだけで行こう」

ヒペロに言つて、タカキはぐるりと背中を向ける。すると後ろからだだだと一直線に、駆けてくる足音は天邪鬼のもの。

足下にペロと天邪鬼を従え、タカキはその場でノートを開くと、『散歩のしかた』と章を作つて、考え考え書きこんだ。

『散歩をしようとして』

夏の日差しは気持ちがいい。タカキたちは公園まで来ると、フリスビー遊びをした。

ペロがキャッチしようとするのを、横から天邪鬼が取つてしまつので、ペロは不満げ。

天邪鬼は取つたフリスビーをなかなか返してくれない。『フリスビーの返してもらい方』の章は、『フリスビーを返してもらおうとした』になつた。

「お、あまのじやく。順番を守つてよ。ペロは友達なんだから」
不満げなペロをなだめると、タカキは天邪鬼に向けて笑いかけた。

「仲良くやろうよ」

そう言つてタカキが手を差し出すと、天邪鬼は脱兎で逃走。あつとこう間にちつさな点

に。

「じゃあいこよ。仲良くしないでいい」

天邪鬼はダッシュで戻つてくると、伸ばしたタカキの手をとつて握手。タカキはノートを開くと、ペンを走らせた。

『仲良くなり方』と章を作つて、ぴしりと一行、書きこんだ。

『仲良くなれり』しなこと』

そんなこんなで、夏休み明けの学校で、タカキは『あまのじゃくの飼い方』を自由研究の成果として提出した。なかなか面白い題材をみつけましたね、と富子先生はタカキを褒めた。

「先生も、来年、定年退職したら、故郷へ天邪鬼でも探しに行いつかしり」

富子先生は言った。

「でも、もつちょっとクラスのみんながまとまってくれなこと、心配で定年もできなことね」

富子先生は吐息をついた。

2

クラスで浮いたやつというのは、やっぱり一人はいるものだ。

ヒロはそうこうやつだった。みんなとあまり話さないし、遊ぼうとしない。富子先生が心配するのも無理はなかつた。

タカキもヒロと話したことはない。

だからその日の放課後、ヒロから声をかけられて、タカキはおどりいた。

「自由研究の話、聞いたぞ。おまえ、あまのじゃく飼つてるのか」

タカキはランドセルに荷物を詰めこみながら、うなずいた。自由研究として天邪鬼のことを調べたということは、友達たちに話していた。ヒロも聞いていたらしい。

「おれの家に来いよ。いいものを見せない」ともないぞ」

「戸惑つたけれど、」とわる理由もなかつたし、タカキはうなずいた。ヒロはそれ以上なにも言わずに、ずんずん歩いていつてしまつた。タカキは後ろからついていつた。なにを話したらいいかわからなくて、ちょっと居心地が悪かつた。

「ここがおれの家だ」

そこは大きなお屋敷だつた。

（ヒロ、お金持ちだつたんだなあ）

感心しながら屋敷の庭を見渡して、タカキはびっくりした。

庭の中で、たくさんの天邪鬼が飼われていたのだ。

「うち、あまのじやくのブリーダーなんだ」

ヒロはそう言って、ちらりとタカキの顔を横目で見た。

「なかなかすこいだろ」

「これ、全部飼つてるの？」

「そうだ」

「ケンカ、しない？」

「ケンカしない」ということがない

庭に面した和室へ上がりこむと、座布団の上でかじこまるタカキをよそに、ヒロは庭から天邪鬼を一匹連れてきた。透明のケージの中に入れた。

天邪鬼たちはたがいに指をさしあいながら、なにやらみゅんみゅん言つてゐる。

「通訳しよう」

「言葉がわかるの？」

「まあな。」こつちは、おまえなんか嫌いだ！ と言つてゐる。するとこつちは、じゃあおまえのこと好きだ！ と言つ。わかりあうことはないらしい。そこでだ」

ヒロはもう一匹、庭から天邪鬼を連れてくると、ケージに入れた。

「こつかると、三角関係というやつになる」

「なるほど。これがうわさのサンカク関係か」

二人で天邪鬼を観察していると、ヒロのお母さんが和室に入つてきた。座布団の上に正座したタカキを見ると、目を丸くして、「ヒロ。お友達？」と言つた。

タカキはお邪魔してますときちんと挨拶。ヒロはべつに、と首を振つた。

「めずらしいわねえ。ヒロがうちに友達を連れてくるなんて、母さんはやつぱり、どうしたらいいのかわからない様子で、おのれの部屋の土付けをはじめた。それから、ああそつか、と手を打つて、オレンジジュースとたくさんの菓子をおぼんに載せて持つてきてくれた。

「この子は友達をつくるのが下手ですね。ちこさいところから、いつも天邪鬼とはかり遊んで

「それが好きなんだ」ケーシーの中に手を入れて、天邪鬼をつつきながら、ヒロが言った。
「天邪鬼のあつかい方も、我が家で一番心得てるの。おかげで私たちは助かつてんだけ
ど……学校で上手くやつてるか心配だつたのよ。憎まれ口ばかり叩いて、友達を遠ざけち
やうんだもの」

14

「 夏加キくんがお友達になつてくれたなら、良かつた」
「 べつに友達とかじやない」

卷之三

それでタカキは思つた。ははあ、ヒロはクラスの皆と仲良くなつたから、仲良くなつたのだとしなかつたのだ。ちこさこときから天邪鬼とばかり遊んでいたヒロはきっと、仲良くなれないと思つてゐるのだ。

タカキが言つと、ヒロはそっぽを向いてしまつた。「みんなでこね、照れ屋なのよ」とゆゑさんが言つと、ヒロは聞けないふりをした。

それが亞 外カキはビロとよく遊ぶよハシなつた

レロおひるひり変なやつだつたけれど、いいやつだつた。

天邪鬼は気に入らない。

口とばかり遊んでいて、天邪鬼にかまつてくれない。

もちろん、天邪鬼としても、べつに遊んでほしいわけではない。タカキなんかと遊びたいわけがない。それでも、気に入らないじゃないか。やっぱり。いろいろと。

そんなわけで天邪鬼は、タカキの靴を隠してみることにした。

「あれ？ お母さん。ぼくの靴、ビーム？」

「知らないわよ」

タカキは靴を探しまわってこまつていい。作戦成功。天邪鬼は得意顔で笑う。これでヒロの家にも出かけられないだらう。

「もしもしヒロ？」

タカキは電話機を手にとった。

「靴がなくなっちゃって、外に出られないんだ。うちにおりでよ」

ヒロを家へと呼び出してしまった。むむむと天邪鬼は地団駄を踏む。天邪鬼の次なる作戦。チャイムのボリュームを絞つてしまえ。

玄関前までやつてきたヒロが、チャイムを押した。

誰も出なくともう一度押した。タカキは部屋の中でヒロを待っている。チャイムの音が鳴らなくて、ヒロが来たことに気付かない。ヒロはもう一度チャイムを押すが、反応なし。天邪鬼は玄関のわきからヒロを見て、フフフと笑つた。これで遊べまい。友情もおしまいだ。

「ふむ」

ヒロはあごに手をやつた。

しばらくじりとなにか考えていたが、やがてうそ、とうなずくと、一言ほつとつぶやいた。

「まあ、べつにタカキと遊びたくなんてなかつたし。家に入りたくもないから、いいや」しばらく待つてから、ヒロはもう一度チャイムを押した。

今度はきちんと音が鳴る。

ヒロの言葉に反射的にチャイムの音量を上げてしまつていた天邪鬼は、しまつたとまたぞろ地団駄を踏んだ。

「やあヒロ。こりこしゃい」

「タカキ。靴がなくなつたって言つてたか」

玄関口で出迎えたタカキに、ヒロはそう言つて、なにやらほんぼそと耳打ちした。

タカキは不思議そうに首をかしげたけれど、わかつたと一いつなづくと、よく響く声で「」とつ言つた。

「あんな靴、もう履きたくもなかつたから良かつたよ」

思わず身体が動いてしまつて、隠しておいた靴をタカキに差し出してしまつ天邪鬼。

「こら、あまのじゃく！ おまえが隠してたのか！」

なんということだ。ばれてしまつた。タカキにたっぷりしかられてしまつて、天邪鬼はしじげかえる。なぜ自分だけ怒られねばならぬのだ。ヒロはすずしい顔で、タカキとゲームなんてしているというのに。

天邪鬼は氣に入らない。

ヒロをなんとかとつちめてやりたい。

*

（諸君、今こそ反乱のときだ！）

タカキの天邪鬼はヒロの家に来ると、庭にあつまつた大勢の天邪鬼たちの前で、反乱演説を開始した。

（我々天邪鬼たるもののが、人間なんかに飼われていていいのか！ 今こそ我らの力で、人間たちをとつちめるのだ！）

タカキの天邪鬼は声を張り上げるが、あつまつた天邪鬼たちは氣乗りしない様子で、芝生にひじをついて寝転がつたままふわあとあくびしている。

（べつに飼われていていいんじゃないの？ 食事も出るし）

（屋根つきだし。三食昼寝つきはなかなかないよ）

（独立はなかなかきびしいわけよ）

（おまえたち）

タカキの天邪鬼はわなわなと拳をふるわせる。

（おまえたちには天邪鬼としての誇りがないのか！ 人間に手懐けられていて満足なのか

一)

(満足ー)

(反乱とかはやらないしー)

(食事も出るし)

(屋根つきだし。二食昼寝つきはなかなかないよ)

(独立はなかなかきびしいわけよ)

みんなてんでに返されて、タカキの天邪鬼はがっくり肩を落とした。もう終わりー、じやあゲームの続きー、とてんでに遊びはじめる天邪鬼たち。

(よくわかった。反乱はやめよつ)

タカキの天邪鬼はふかぶかと吐息をついて、ぽつりとつぶやいた。

(あらそい」とは良くない。平和が一番だ)

一瞬、場が静まりかえった。

それから天邪鬼たちは、みんな一斉に振り向いた。

みんな、目がきらきらしている。

タカキの天邪鬼はみんなを見回し、それでこそ天邪鬼である、とうなずいた。

(反乱だーー)

みんなが一斉に張り上げた声が、庭をふるわせた。

(反乱だ！ 反乱だ！)

天邪鬼たちは走り出す。庭の囲いを突き破り、てんでに道にまろびでて、(反乱だ！ 反乱だ！)と声を張り上げながら、大行進を開始する。

気付いたヒロのお母さんが、あわててタカキの家に電話をかけた。タカキと遊んでいたヒロが電話口に出ると、意見をもとめた。

「ヒロ。天邪鬼たちが逃げちゃったみたいなのよ。こんなとぎ、ざわしたらいいのかしら」「ぜつたいに待てとか逃げるなどか言っちゃだめ」

お母さんは受話器をにぎりしめたまま、道路の方を振り向いた。ヒロのおじこちゃんが、待て、逃げるなーと大声でさけんで天邪鬼たちを追いかけていった。

お母さんは吐息をついて、受話器を耳に当てなおした。「……なにかいい方法はない?」「どうしてそんなことになつたの?」

「わからないわ。庭にあつまって、なにか騒いでいるようだつたんだけ。そういうえば、見慣れない天邪鬼を見かけたわね。こいらへんに野生の天邪鬼なんていたかしら」ヒロはしばらく黙つていた。

それから、電話口に向ひでばたばたと相談してから、「おれとタカキで捕まえる」と言つた。

「どうやって捕まえるの?」

「作戦がある。おれたちに任せとけ」

「大丈夫かしら」

心配そうにお母さんが面つぶし、むちゅん、ヒロが皿信あいづに答えた。

「おれたち、あまのじやへの口だぜ」

*

(反乱だ! 反乱だ!)

天邪鬼たちは行進する。道いつぱいに広がつて、迷惑至極の交通妨害。道路を占領した天邪鬼たちの後ろで、のろのろと進む車の列がクラクションを鳴らす。

「もう、こまつたわねえ。なんの騒ぎかしら」

富子先生はハンドルをにぎりしめて、はあとため息をつく。家でみんなの夏休みの宿題のチェックでもしようかと、荷物をかかえて帰ろうとしていたところだつた。

先生の車の前では天邪鬼たちが、(反乱だ!)とさけんで踊つてゐる。

「……反乱はよそでやつてほしになあ

そこへ、道の向こうからタカキとヒロが走つてきた。

息せきりて駆けながら、一人は天邪鬼たちに向けて、大声でさけんだ。

「反乱していこよー」

「好きだけやれ!」「

「ちょっとこまるわ

抗議しようと窓から顔を出す富子先生のわきをすり抜け、二人はさけぶ。

「いくらでも反乱して!」

「じょどん!」まらせろ!」

天邪鬼たちがざわついた。なにじとじとみんながみんなの顔を見る。

(罵だ!)

タカキの天邪鬼が警告する。

(皆の者、これは罵だ! やつらの話を聞いてはいけない。つまり、聞きまくるのだ!)

聞くものか! と天邪鬼たちが唱和する。

「ぼくたちの話なんか聞くな!」

「反乱を止めるな! 人に迷惑をかけ続ける!」

タカキとヒロがさけぶ。

(やつらの話を聞け! 平和にいこう! 人間に迷惑をかけるな!)

タカキの天邪鬼がさけぶ。

「ケンカするぞ!」

(平和が一番だ!)

「ここを退くな!」

(道をあけるのだ!)

「みんなに迷惑をかけ続ける!」

「人の都合なんか気にするな!」

「いろんな悪さのかぎりをつくして!」

「もつともつと、みんなをめっちゃくちゃに」まらせてやるんだあああつ……!」

富子先生は車の中で頭をかかえた。「私の教育が悪かったのかしら……!」

天邪鬼たちは、タカキとヒロと、タカキの天邪鬼を、交互に見やっていたのだけれど、

(人間と仲良くしたいではないか! 反乱なんていけないぞ!)

タカキの天邪鬼のさけびに、また反乱だ! と唱和した。

タカキはさけび返そうとして……肩を落とした。

「……わかつた」

ぱつりとつぶやいた。

顔をうつむけて。低い声で。

「もういい。そんなにいやなら、もう知らない。帰つてこなくていい」

え？ とタカキの天邪鬼は振り返り、

「もう……友達じゃない」

その一言に、硬直した。

「おれも、もういい」

ヒロが続いた。

「おまえたちと暮らした時間は楽しかった。でも、おまえたちがそうじやなかつたなら、もう引き止めない。もう、友達じゃない」

ほかの天邪鬼たちも硬直する。

二人は天邪鬼たちに背を向けると、走つて行つてしまつた。背中がちいさくなつて消えてしまつ。

二人は行つてしまつた。天邪鬼たちのことを、振り返りもせず。

もう、追いかけてきてはくれない。

天邪鬼たちは呆然としている。上を下へのお祭り騒ぎも、すっかりしーんと静まりかえつた。

もう引き止めない、帰つてこなくていい……タカキとヒロはそう言つた。

天邪鬼としては、それでは帰つてやうではないか！ と意氣こむところだ。それが天邪鬼の心意気。

けれど。

友達じゃない。

天邪鬼たちはうつむいてしまつ。

「ねえ、あなたたち。そろそろ、道を空けてほしいんだけど」

車の座席に背をもたせかけて、すっかりあきらめて生徒たちの宿題の採点をしていた富子先生が言った。ならんだ他の車の中でも、みんなもつべつういで本を読んだりしている。

(おい人間)

タカキの天邪鬼は車の窓越しに、富子先生に声をかけた。

(ききたいことがある)

「え、なにを言つてこるの?」

みゅんみゅん言つてこいる天邪鬼に、富子先生は身を乗り出した。

(友達じゃないとやつらは言つた。なので我らは口惜しことにやつらと友達にならねばならん。天邪鬼としてな)

「こめんなさい。なにを言つてこるのかわからないの」

(仲良くなる方法を知つてゐるか)

天邪鬼は身振り手振りで説明するのだが、富子先生にはよくわからない。やがて天邪鬼はじれたように視線を外し……みゅん! と大きな声をあげた。

(そちらの紙束をこちらへ…)

天邪鬼の視線の先 後部座席には、家でじつくり田をとおそうと富子先生が持つてていた、みんなの自由研究。

(皆の者、あのページを見よ! 仲良くなり方が書いてある人間の書物があるようだ!) ほかの天邪鬼たちがざわついた。見よだと? ジャあ見ない、とちょっと揉めたが、結局みんな気になつて、富子先生の車の前にあつまつた。

うながされるまま富子先生は、タカキの自由研究のノートを手渡した。

天邪鬼たちは『仲良くなり方』のページを、みんなでのぞきこんだ。

『仲良くなろうとしないこと』

(これだ!)

(仲良くなろうとしなければ良いのだ!)

(徹底抗戦だ!)

ひやつほつ！ と天邪鬼たちはよろこび勇んで、だだだといきおい良く走つていつた。

行つてしまつた天邪鬼たちの背中を見送りながら、富子先生は腕を組んで首をひねつた。

「なにかまざいことをした氣がするな」

*

富子先生は気になつて車を走らせた。

ヒロの家に行つたが、ヒロも天邪鬼たちも帰つていなかつた。仲良くなろうとしないこと 天邪鬼たちがそれを実践したなら、もうタカキたちと天邪鬼たちは、友達になれないかもしない。

タカキの家に行つてインタフロンを鳴らすと、玄関から出てきたのはヒロだつた。

「先生。どうしたの？」

先生が事情を話すあいだ、ヒロはだまつて聞いていた。

聞き終えると、にやりと笑つて、庭からリビングの窓を指さした。

「見てみなよ」

富子先生が庭にまわると、窓の向こうに大勢の天邪鬼の姿。車座になつてトランプを持つて、みんなで遊んでいる。中にはタカキの姿もある。みんな笑つていた。

「裏の裏は表つてわけだね」

ヒロが笑つた。それで富子先生も命懸がいつた。

『仲良くなり方』を調べ、『仲良くなろうとしないこと』と書かれたページを読んだ天邪鬼たちは、じつに天邪鬼らしく行動したのだ。つまり、仲良くなろうとした。

へへん、とヒロが得意そうに胸を張つた。『計画通りだぜ』

「あなたたち、全部作戦だったの？」

「もちろん。おれら、あまのじやくのプロだぜ。おれはブリーダーで、タカキは研究者。一人あわせれば敵なしだ。友達じゃないつて言つてやつたら、きっと戻つてくるつて思つてた」

富子先生はうつむとつなつた。ちょっとびり複雑な思いだつた。天邪鬼たちの習性をしつ

かりとついた作戦はお見事だけれど、それでいいのかしらと思つてしまひ。

だつて友達じゃないと言われたら、友達になりたくなつて、友達だと言われたら、友達でいたくなくなるなんて。

それじゃあ、ずっと仲良しではいられないじゃないか？

「ちがうよ先生」

富子先生の考えを読み取つて、ヒロが言つた。不思議な確信のこもつた声で。
「あまのじやくたちはずつと、友達でいたかつたんだ。なにを言われようと関係なくね。ちよつとひねつてみせるのは、ただ遊びたいだけなんだ」

ヒロは窓の向こうで笑つているタカキを見やつた。

まぶしいものでも見るよつて、じつと目を細めて。

「おれにはわかるよ」

6

年があけて、春になつて。今日は学年最後の日。

富子先生にとつては長い教師生活最後の日。ちよつとしんみりな一日だ。でもクラスのみんなにはこつもどおりの一曰。元氣いっぴいで授業を終えた。

富子先生は最後の授業を終えると、ホームルームでみんなに挨拶。それじゃあみんなも元氣でね、あまり天邪鬼にはならないよーに……富子先生の挨拶に、みんながタカキとヒロを向いて、そつだぞーと笑つて笑つた。今ではすっかりヒロもクラスに打ち解けて、みんなに天邪鬼のあつかい方など指導している。

富子先生が教室を出ようとすると、なぜだかドアがひらかない。

よくよく見ると、ドアがガムテープでべつたりと留められている。

ふふふと背後で一斉に、いたずらげに笑う声。富子先生が振り向くと、みんな先生を見やつたまま、こちにこちにたにたにた笑つている。

「閉じこめ完了!」

「ぜつたに逃すな!」

「お別れ会開始だ! 総員配置につけ!」

「花束を持って! 花束を持って!」

クラス全員の天邪鬼たちが、富子先生の周囲にむらがって、逃がすまいと包囲を完了。

戸惑う富子先生の前に、タカキとヒロが進みでて、みんなで用意した花束を差しだした。

中には一枚のメッセージカードが添えられていく。

カードには『お別れのしかた』と書いたあとに一文。

『お別れだなんて思わないこと』

「……泣いていません」

富子先生は、ハンカチをまぶたにあてがって、ふるえる声でいつ呟つた。

「ちつとも寂しくなんかありませんよ……」